



【男子個人ダブルス1回戦】第2ゲーム、シャトルに飛びつき打ち返す、帯大谷の廣瀬大城（左）と瀬藤智史組

全国初勝利ならず



（26日、徳島県吉野川市・日本フネン市民プラザ、同鳴門市大塚スポーツパークアミノバリュールホール）

第3日は男女の個人戦ダブルスを行った。男子の瀬藤智史・廣瀬大城組（帯大谷3年）、女子の濱下亜美・江口碧組（同3年・2年）はそれぞれ初戦敗退し、全国初勝利はならなかった。北北海道2位ペアの瀬藤・廣瀬組は1回戦で山田修平・唐木伸（長野・長野商2年）と戦い、1-2で逆転負けを喫した。北北海道覇者の濱下・江口組は、初戦となった2回戦で亀井菜杏・後藤咲々（宮城・聖ウルスラ英智3年）を相手にペ

【男子】◇個人戦ダブルス◇1回戦	山田修平・唐木伸	2121119	101321	1	瀬藤智史・廣瀬大城	2121119	101321	1
【女子】◇個人戦ダブルス◇2回戦	亀井菜杏・後藤咲々	2121119	101321	1	濱下亜美・江口碧	2121119	101321	1

濱下・江口組 初戦敗退



濱下亜美（左）・江口碧の先輩後輩コンビも今大会でラスト。初戦敗退も最後は笑顔を見せる

風に乱され力出し切れず

団体戦に続きまたもや空調の風が影響した。団体戦の会場より新しい体育館で

に思いをつなげるとともに、今回の敗戦で迷っていた大学

での競技継続を決めた。廣瀬も競技続行を決め、後輩にこれまでの経験を伝える気持ち

を口にした。1戦しかできなかったが、全国の大舞台は2人に新たな気持ちを奮い立た

せた。

よく頑張ってくれた

帯大谷男子・相澤俊彰監督の話 トップアンドバック（攻撃の陣形）で前衛が仕事しているときは勝っていた。力が出せたのでは。2人がいたから後輩たちもインターハイ（の空気）を経験できた。よくここまで頑張ってくれた。

第1ゲーム先取意地示す

逆転負けの悔しさを残したが、瀬藤智史と廣瀬大城は共に「やってきたことは出し切った」とうなずいた。

持ち味は出した。第1ゲームはサービスやネット際のプレーがさえ、互角の展開。19から最後は廣瀬が体勢を崩しながらも相手コートに球を落とし、連続得点でもぎ取った。

ただ相手の判断力や球のスピードが上回った。「一つひとつのショットが分かりづらくて強い。レシーブが甘くなってきた」（瀬藤）。第

信頼厚いペアに成長

がどの位置にいるのか分からず目標もなかった」（廣瀬）という間柄だったが、十勝制覇などを経て互いに信頼感を深めていった。今では「相手が来るところを読んで、こ

そで点を連続で取ってくれる」（瀬藤）、「自分が切り替えられても次につないでくれる」（廣瀬）。

来年の北海道インターハイを目指す1、2年生の一部部員6人が帯同し、応援する中、先輩としての意地は示すことができた。瀬藤は、自分たちより強い世代—という2年生

足をもっと使って

帯大谷女子・入江優喜監督の話 風への対応ができなかった。もう少しいいプレーができたと思う。全国では足をもっと使えないと勝負にならない。普段の練習からしていかなければならない。自分たちが勝たなくては—という意識を持って練習を積んでほしい。

の試合は、前後からだけではなく横風も。濱下亜美・江口碧組は第1ゲームの入

りからミスがあり、ペースを握ることができなかった。

苦しい。帯一中の先輩後輩コンビの共通のファンである、韓国の人気男性音楽グループ「BTS」。いつもは試合中の頭の中にBTSの曲が流れ、リラックスする材料になるが、この試合は「まったく流れなかった」と2人。低い球の展開に対応し切れず、高い天井に戸惑いフレイムショットも増えた。

北北海道ナンバーワンペアの夏が終わった。「雰囲気が悪くなって泣かせてしまつこともあったが、仲良く試合することができた」と、笑いながら江口に感謝する濱下は今後、北海道選